3) 経済学的方面より

塚本 哲*

生き甲斐ということを一つの目的概念として、とりあげることは可能なことであるとしても、いわゆる科学的に正確な因果関係において、その実体を証明することは容易ではないと考える。

しかし事実において人間がこの世に生誕し生活を営むところの生涯という過程において、生き甲斐という言葉によって表現されるある事態を無視することはできないのである。としてみれば人間をめぐるあらゆる分野から究明されるのは当然である。そこで私には経済学的方面よりというテーマが与えられたのであるが、経済学を専門としていない私は到底その責にこたえることはできないと思う。しかし社会福祉というような社会的作用のうちで、とりわけ高齢者の老後生活という側面に關係してみると、経済ということのかゝわりが非常に大きなものであることを切実に感ぜざると得ないのである。今夏もさつま半島の独居老人の状態を調べたし、昨年は北陸地方、また現に都市のなかの状態についても老人生活の実態にふれてみて何といっても経済的な生活のあり方にかかわるものが非常に多い、ここではその実態について詳しくのべることはできないが、根底に経済問題が基本をなしていることは明らかである。しかもそれは社会の総体的な制度や機能に左右されているのであって、老後の生き甲斐ということも単なる抽象概念として「心のもちかた」というような本人の軽い刹那的な気分で説明されてはならないと考える。

そこで問題への接近の仕方として、どう科学的であるかということになる。一般に自然科学といわれる場合には、自然現象を対象とするところの認識であり、したがって、そこには因果性の範疇とそれによって実証される証明があるわけで、厳密な意味での科学が成立するものと心得ている。

これに対し社会科学の場合は、社会的現象を対象とするところの科学的認識である。社会現象といえば、そこには人間の生活の営み主体をなすものであるが、人間は意志の自由をもち、それゆえに非合理を含んでいるから、截然とした計測が不可能であるとされ、したがってある目的を設定し、それに向って手段を講ずるという目的論的な関連はたどることができるとしても、自然科学のような因果性の範疇を適用して、一原因—結果—という関係をたどること

は極めて困難であるとされてきたのである。

けれども人間はそれ自体が自然の姿であると同時に、自然を客体として働きかけ、新しい技術や創造性をもつ行動とし生活していく、いわば「人間の人間」であって、その関係は自然的現象よりもかえって広く複雑であるけれども、そのなかにはある法則性を含み、社会現象を対象としながらも、因果性の範疇を使用し、厳密な意味においても科学として成立するということが現在の定説となっているのである。この点についてはマルクス、ないしウェーバーなどの諸説、その他の諸学者によって明らかにされているところであるが、その内容にふれることはここでは省略する。

さて本題の「生き甲斐」ということについて私の關係している社会福祉の立場からするならば、福祉とは究極において「人間の自由」あるいは、「幸福」を指すものであって、したがって具体的に「生活を営む人間」を主体とすることになるのであるが、それは総体としての社会の仕組み、とりわけ生産と分配という基盤において、その経済的生活、さらにそれを土台とする情緒關係について、具体的に「人間」を問題とすることになるのである。端的にいうならば「人間の疎外關係」を生むところの生活のかかわりである。

ここで視点をさらに集約して、「人間の生き甲斐」ということは疎外關係、すなわち結果的にみて「人間自らが自らを疎外する」ということと対比して考えることが捷徑であると考えるのである。そしてそのためにはまず生きがいということについて仮定の概念を設定しておかなければならないのであるが、それは生きるための本来的な「生産的労働」(行為といってもいいであろう)が遂行されることであろう。すなわち諸個人が働くということ、したがってその行程においていくばくかの苦痛は伴うにしても「働くことが喜び」であり、生きていることそれ自体が喜びであると考え、もちろん働きには「苦悶」するような苦痛も伴うものであるが、芸術家が芸術するように、峻しきにも平面に喜びが伴うものである。そしてそれは人間社会のなかに普遍的に共感をよぶものであり持続的な性質のものである。したがってそこには自己疎外という事態は起る余地を伴わないものと考えられる。何となれば集団の構成員である諸個人が、基本的に自由であり、そして相互に自由を防衛する行動と意識をもち、集団のなかに指導者は当然存在したとしても権力による支配と被支配がなかったからである。

*T. Tsukamoto: 仏教大学社会学部

したがって能力に応じて働き、必要に応じてとるという経済的な生活の具体化があったからと考える。

モルガンの「古代社会」にみられるようにアメリカインディアンのイロクオイ氏族は、「全員は個人的に自由であった。また相互のために自由を防衛すべき義務をもっていた。彼らは氏族の中における特権と個人的権利においてまったく平等であり、酋長は選挙によるとあるいは世襲によるとを問わず、優越感を主張すべしとなく、そしてともに血縁の紐帯によって結ばれる同胞であった。自由、平等、友愛ということは、かつて公式とはされなかったが、氏族の根本原則であった」⁹⁾こうした人間本来の自由、平等の原則は公式的な制度以前の問題として未開人の社会を貫く構造的な原則であったし、このことは現在においても未開人といわれる、むしろ麗しい人間集団のなかにみられるところである¹⁰⁾

① 「モルガン・古代社会荒畑寒村訳から」改造社

② 「伊谷純一郎ゴリラとビッグミーの森、の中にみられるパトワ・クワタニシャの話から p205 岩波新書 427から」

このような人類の生活状態は、人類の歴史のなかにおいて最も永い期間を経過したものであって、こうした原始的共同体のなかに起った矛盾、すなわち私有財産制の萌芽をみるまで続けられたものであった。したがって現在のような私有財産制をふまえた社会構造、そしてそれゆえに人間の疎外関係をつくっている社会が永遠不変なものであり、人間の本質的な姿であると断定することはできないのである。

原始共同体の時代について起るのは権力者による支配の社会であって、権力的な構造が一般大衆への搾取と抑圧によって支えられてる。この時代において大多数民衆の生活は極めて悲惨であり、人間疎外の必然性のなかにおかれた。例えばわが王朝時代にみても（700 年代）人民の生活程度は「上々戸」「下々戸」および「等外戸」の10級に分れていたが、730 年の越前の記録によれば、9 割以上が「等外戸」であり、750 年の安房の記録においては8割近くが等外戸であり、「下々戸」2割5分である。（等外戸とは、いますぐに救済を必要とする生活程度）当時の歌人であり良心的な地方官であった山上憶良が、民衆の悲惨な生活状態について、かの有名な「貧窮問答歌」といわれるものを残している。このような社会状態のなかにおいて、もし生き甲斐をもつものがあるとすれば、それは極めて一部の階層に属する人であり、上級の支配層であったにちがいない。

時代の推移により社会の支配的様相は変化していくのであるが、武家政治の時代となっても支配関係については変わるところがなく下層民の生活は依然として悲惨なものであって、武力を背景とする一門のみがそれぞれに生き甲斐というようなものをもったであろう。この世おぼわがよとぞ思う もち月の かけたることのなしと 思えば

という歌があり、清貧の作といわれているが、よくもこのような状態を象徴していて、大多数の民衆生活の犠牲の上に築かれていたのである。

徳川 300 年のいわゆる封建社会においても事情は同様である。幕藩体制の眼目である農民支配と収奪について、家庭の信任をうけて天領の農民収奪体系の基礎をつくった本多正信が「百姓は天下の根本なり。これを治るに法あり、まずひとりひとりの田地の境目をよくたて、さて1年の入用、作食をつもらせ、その余を年貢にねむべし。百姓の財の余らぬように、不足なきようにねむこと道なり」としており、諸藩農民の人格を全々無視し慶安のふれ書には「百姓は分別もく末の考もなきものに候故、米雑穀をむさと妻子にも食わせ候、——飢饉の時と存じ出し候えば、大豆の葉、あずきの葉、ささげの葉、いもの落葉など、むさと捨て候儀はもったいなき事に候——大茶をのみ、物まいり、遊山如きする女房は離別すべし」とも書いている。また身分上賤民とよばれるもののある階級制のなかに、およそ生き甲斐などということなど考えられないことである。

さらに明治維新から歴史学者のいう「絶対主義」の時代を経て資本制社会のなかにおいて、古代社会によられたように身分制的自由の束縛から逃れたとしても、私有財産制とこれに伴う資本の不思議な梗塞は現在にも及んでおり、真の生き甲斐から離れた疎外は社会的総体的な利用となっているのである。このことについて、資本論による社会科学的な疎外の理論の一端にふれてみることにしよう。

資本論は全三部からなり、第1部第1篇第1章の「商品」からはじまり、第3部第7篇第5章「諸階級」にいたっているのであるが、その全体に通じてここで理解することはもちろん困難であるが、まず「商品」というものが人間の生活にどのような関係をもつかそのほんの一端についてみることにし、それが人間の疎外ということといかに関係づけられるかについて一覽してみたいのである。

一般的にいう「商品」とは「富」の基本的形態をなすものだと言われる。すなわち商品とは人間の欲望をみたすもので、その商品の有用性が「その物」の使用価値でありとする。つまり有用性は商品として「物」を離れて存在しないものである。したがって商品としての物は使用価値であり、まだ、「財」である。

使用価値といわれる場合には、奴隷性の社会、封建社会、また資本主義社会といわれる異なった社会的形態のなかにおいても、一様に「富」の内容であることには何の相違もない。しかし資本主義社会においては、使用価値は「交換価値」の素材的担い手となってくるのである。

交換価値とは、ある使用価値と他の使用価値とが交換されるところに量的な比率となつてあらわれてくる。それは偶然的にまた相対的にきまるものである。1クォーター量の小麦はY量木綿、Z量の絹というように交換され得るか

ら、諸商品はすべて1クォーターの小麦の交換価値をもつことになる。このように商品はいずれも交換価値をもつのであるが、そのかわり、それは元の価値に還元されることでもなければならない。かくして交換価値というものの特徴は使用価値をいうことを捨象して、商品はたがいに同質なものであり、ただ量的にのみ異なるということになるのである。

かくして商品の交換価値は相対的な価値形態を必要とすることになる。そのことは必然的に貨幣という形態をとることになる。資本論ではこの関係から出発して綿密にしかも理論的に説明されるのであるが、ともあれ使用価値—交換価値—それは貨幣形態に展開し、貨幣は蓄積されるから巨大な資本構成へと転化する。すなわち交換価値—貨幣価値—その集合の巨大な作用は、その生産行程において余剰価値を生み、流通過程ともあわせて拡大される。現在の資本主義的体制においては、私有財産をふまえているから、資本と労働という対立関係において力関係となり、そこに階層関係が生じて、労働力のみを売物としなければならない階層にあるものは、常に被支配的である。

資本主義の展開ということは商品の龐大な生産によって人間の欲望を充足し、それは自由にみえる姿で原生的な社会的束縛から人間を解放したかのようにみえる。しかし実際には諸個人の目には見れない、むしろ自然の法則と思われるような「自然成長分業」(die *Nurwochsige Teilung der Arbeit*) といわれる偶然性にゆたえられるのである。自然成長的分業というのは、大ざっぱに言って、われわれ人間はさまざまな職業的分化のなかに社会的共同 (*zusammenwirken*) の形態において物質的新陳代謝をなさしめ、経済を成立させているのであるが、その分業と共働とは何の計画性もない偶然的なものとして行なわれているという意味である。すなわち人間諸個人が、特定の生産部門ないし職業分門において、社会全体としての何らかの計画があり、それによって意識的にそれぞれの部門に割り当てられるのではなく、ただ偶然的にいわば与えられたものとして受けとる仕方であり、社会全体の欲求を満たす物質的な新陳代謝がどのように行なわれているかはまったく私的なものとして行なわれ、したがってその営みが現実社会の必要を満たすかどうか、結局、需要と供給の関係が押しあい、へしあいして市場という交換過程の場にはめられていく姿でしかない。別な言葉でいえば生産諸力を支える経済的基盤が、——本来人間諸個人の力の総和にはかならない社会的生産力が、そしてその生産物が人間からまるで確立してしまって全体を見渡せない、また人間の力ではどうにもならないような客観的な過程をなしているということである。

このような社会構造の姿のなかにおいて真の人格的自由はあり得ず、たとえば資本主義という私有財産制の結合体に根底をおく、別な言葉でいえば、交換価値を通じて貨

幣価値を増大し蓄積することを目的として営まれる機械化の社会において、好むと否にかかわらず、人格を無視した歯車の一駒とし産業構造のなかに組込まれ、自分の労働している場所が、公害を排出しつづけている非人間的な企業であることを充分承知しながら、そこに働くことを余儀なくされている。

海洋の著しい汚染は魚食の国民に安定した気持で食うことをゆるさない。このような環境のなかにおいて生きがいというようなことはあり得ないであろう。もしあっても偶然的であり、利病的であるわけで、これをもって、真の生き甲斐とはいわれず、あったとても偶然的な生き甲斐の虚像に過ぎないではないか。

しからばわれわれ大多数の人間には本来的に虚像の生き甲斐しか持ち得ないものであろうか。私はそうばかりとは考えられない。すなわち、このような虚像の生き甲斐から断固決別して、真の生き甲斐とは何かということを根強く追求する。そしてそのことに主体的な認識をもち、自ら正しい判断の上にロイアリティをつくす、そのことによってかえって生き甲斐ということを見出す過程があるものと私は考える。前にもふれたように人間の場合、自由なる意志の働きという非合理性をもっているから、社会科学においては因果性の範疇において真理を追及することは不可能であるといわれるが、マックス・ヴェーバーは、このような見解を否定し、むしろ逆に人間の自由意志の領域が拡大されることは、それだけ因果性を追求する領域と資料が確実となるものというのである。おそらくそれは一口に言って目的論的関連を因果関係に組みかえるということの意味し、すなわち生きている人間諸個人というものは、それがどの程度意識的であるかは別として、絶えずある目的を設定し、手段を選択して決断を下しつづける行動する。このことは目的のために客観的な過程を追求していくこと、それは原因—結果という自然科学と同様な因果性を有し、科学性を確立するものである。かく私にはヴェーバーの所論が理解される。

マルクスの経済学的批判の立場にたつての人間疎外の理論は、もちろん科学的であり、不十分ながら私にも理解することができる。そして疎外からの開放は人類の歴史の弁証法的展開のなかに必然性をもつものであるが、人間の歴史は人間が造っていくのであるから、現在に生きる人間が、ヴェーバーのいうように目的論的追求のなかに、原因—結果の関連を確実にたどって因果関係による科学性を樹立することも可能であろう。このことは自然科学の方法と同じものであると、理解することもできるのである。

してみれば、社会科学的にも生き甲斐ということを経験することが可能となる、ということよりも、かかる理解の仕方によって極めて重要な生き甲斐論を確立することができると思われる。かくて一見抽象概念的であるとされる人間

の生き甲斐という課題も、自然科学、社会科学ないし人文的科学的の接近や交流、さらには総合的な歩調によって、真理に接近することが可能であると考え、それは生き甲斐ということが、人間諸個人の問題であるとともに、社会的に普遍性を確実に意味するものでなければならないし、それは心理的な認識の領域にとどまることなく、実践そのものでなければならないのである。

現在、極度に機械的に作用している社会構造のなかで、疎外から逃れようとする無識的な個人ないし社会的ふるまいが恣意的、独善的であって、それこそ生き甲斐であるという迷妄にいろどられており、とりわけ手段も方法も選ばない快楽の追求が盛んである。それとは逆に、現代に無関心であって空虚なる超越が生き甲斐と感じとっている者もある。こうした姿はもちろん虚像であるが、良心的ではあ

っても偶然的にまた利根的に「これこそ生き甲斐」と自ら認知する生き甲斐も所詮は虚像であると思うのである。

真の生き甲斐とは常に普遍的に、全体的人間というものを基盤とし、公開性と永続性をもつものでなければならないと考える。

私は社会福祉という社会の作用のなかに細かに関係しているものであるが、社会福祉とは究極において人間が自由であり、そしてそれは人類共同の概念に結びつくものであると思うのである。生き甲斐ということが自由の追求であり、それが全体的人類という理念を基礎として追求されるところに、人間諸個人の自由や生き甲斐が成立するものと考え、

③ 註 井上 清 日本歴史岩波新書 500